

趣味を生かして QOL の向上

～帰宅願望が強い認知症利用者に対して～

施設名：介護老人保健施設 白寿園

発表者：赤嶺 実保

金城 春菜

【はじめに】

認知症にて施設に入所していることが理解できず帰宅願望が強い利用者に対して、新型コロナウイルスの影響により面会等制限がかかる中、どのように対応したらよいかという場面に直面した。帰宅願望が強い状態のまま日々を過ごすのではなく、利用者の苦痛を軽減し生きがいや満足度を上げる方法を模索した所、その方の趣味や特技を生かすことで施設での楽しみが増えるのではないかと考え、実践したので報告する。

【事例紹介】

氏名：I 氏 男性 92歳

介護度：要介護1

既往歴：認知症(HDS-R 8点)

COVID-19 感染後廃用症候群

慢性閉塞性肺疾患、慢性頭痛

腰椎椎間板ヘルニア、慢性腎臓病

坐骨神経痛症候群

ADL 状況：基本動作 自立

トイレ動作 見守り

歩行 見守り～軽介助

入所当日から帰宅願望が強く、ご家族に電話対応して頂くことで一時的に落ち着くも、電話を切った後はすぐに通話したことを忘れてしまう状態であった。ご家族からは電話をすることで余計に帰宅願望を助長させてしまうのではないかという不安の訴えもあった。

車椅子から頻回に立ち上がり、徘徊やエスケープもあったため、日常生活は職員との1対1対応で常に近位見守りとなる。

入所事前情報より趣味で古典三線やっていたとの情報があった。

【結果】

I 氏へ三線を弾けるかを問うも「もう弾けない、忘れている」と拒否があった。しかし実際に手渡してみると自然に弾き始め、I 氏の周りには他の利用者も集まり、I 氏が弾く三線にあわせて歌をうたったりカチャーシーで踊ったりする姿があった。

1日中訴えていた帰宅願望は大幅に減り、眉間にしわを寄せたこわばった表情に笑顔が見えるようになった。

職員対応は遠位見守りへ変更となった。

ご家族にも現状を報告すると「電話をしたほうがいいのかしないほうがいいのか迷う日々だったが安心した」との声も聞かれた。

【考察】

新型コロナウイルスの影響により外泊制限や面会制限でご家族対応が困難である中、職員対応を手厚くするしか方法がないと行き詰っていた状況で、本人の趣味を引き出し提供する視点に気づかされた。集団生活で1日の活動内容が決まっている環境だが、個々の能力を引き出すことはQOL向上に繋がると気づけた。

また今回は趣味が三線であり、フロアに流れる曲につられ周囲の利用者のQOL向上にも繋がったと考えられる。

【まとめ】

よりよい日常生活を送って頂くために、元気なときの趣味や特技を本人・ご家族や身近な方から聞き取り、疾患名や検査結果にとらわれず実践していく姿勢が重要である。

帰宅願望が強い認知症利用者に対し、安全配慮から介護・介助度をあげることも大切ではあるが、趣味や特技を生かすことが大きな役割を果たした経験を活かし、今後も利用者に関わっていきたい。